
女子大生とバカ男

あいにゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女子大生とバカ男

【Zコード】

Z4940D

【作者名】

あいにゃん

【あらすじ】

シェイクスピアの「ロミオとジュリエット」のパロディ。お金持ちの女の子ジュリエットとちょっとマヌケな男の子の悲しくも儍い恋の話・・・だと思ひ。

第一話

ある街にある美人な女子大生がいました。

彼女の家はとてもお金持ちで

その辺りではまあまあ有名な高級住宅街に住んでいました

そしてまたそこから少し離れた桜の名所に

とてもお金持ちで成績優秀でキレイな顔した男の子が住んでいました。

しかし彼は学力における偏差値は高いのですが
どうしようもない欠点を抱えていたのです。

ある日、女の子は学校で友達と話していました。

「なあなあジユリエット、今度合コンせーへん?」

「あ、でもジユリエット彼氏おつたんやつけ?」

「・・・合コン参加で」

「あれ?彼氏ええの?」

「別れたし・・・」

「マジで!?やつたージュリエット参加ね!」

「で、幹事は誰なん?」

「あ、私。彼氏の学校の人呼んで貰うから期待してて!...」

「あなたの彼氏って、ダメ男じや・・・」

「一同は不安でしたが

華の女子大生

合コンに行かないわけありません

そして合コンの出口。

巻紙ミニスカといつやたらと気合の入った格好で女の子が集まつたのに対し

男の子はいかにも東京の某テクノパラダイスで見かけそうな服装でした。

「ねえちょっとー。アンタの彼氏って・・・」

ジュリエットが幹事の女の子に言い寄つたときその後ろにいた男の子に目を奪われました。

ジュリエットは一瞬で恋に落ちてしまったのです。

その時相手の男の子もジュリエットに心を奪われてしまったのです。しかしながらその男の子は幹事の女の子の彼氏だったのです。

そんなことはジュリエットには問題ではないのです
持ち前のポジティブ思考、美貌、金、その他もうもう
全てにおいて自信がありました。

それと同時に、それら全てを捨ててでも彼と結ばれたい一心でした。
まだ会話したこともない友達の彼氏なのに・・・。

しかしそんな彼は

お酒は飲めない、飲んだら暴れる、バカ男の
三拍子そろつた扱いにくい人なのです。
合コンでも寄つた勢いで・・・

「はじめまして、俺口ミニ太。しくみるーー」

「は・・・はは・・・はじめまして」

「君可愛いね。俺つちフォーリンラブしちゃつたよ」

「は・・・はは・・・はー」

「今から2人で抜け出してどうかお茶でもこーちゃん」

「は・・・はは・・・は」

「じゅートイレ行くフコして抜け出すやつ

とはじめての会話で合コン抜け出し大作戦を立てるのでした。

しかしロリヰ木君には彼女が・・・

第一話

ジユリエットは気がつきました。
ロミオは自分の友達の彼氏なのです。
友情をとるか恋をとるか

でも私には彼しかいない気がする！（心の声）

「「めん、私も手洗い行ってくるね
「はーい、いつてらっしゃーい」

そんな中ロミオ君は

「飲まんとやつとられんわー」
「ロミオ！幹事なんだからそんなに飲まないでー」
ぱちり彼女に監視されていました。

トイレに行かず入り口付近でジユリエットは待っていました。
そんなときラタクルックの少年がやってきました。

「やあジユリエットちゃんだよね？」

「はー」

「こんなところで何してるの？」

「何だつていいでしょ・・・」

「そんないわんとさー君かわいいね」

「ありがとう」

ガツシャーン

店の奥でガラスが割れる音がしました。
嫌な予感がしたのでジュリエットは急いで戻りました。

嫌な予感が的中です。

お酒を飲みすぎてロミオ君が暴れていきました。

「だから俺はジュリエットのことが好きやつじゅーとゆやうが…」

「きやー暴れないで…！」

「私の立場はどーなるんよ…!…!…」

「お前とは別れる」

「ちょっとそれどーゆーー」と…?」

「だからお前と別れてジュリエットと付き合ひつんやー」

「なんでジュリエットなんよ…?」

「もう、ケンカはやめて…!…!」
ジュリエットは止めに入りました。

「私は、彼が必要なの。」「めんなやー」

「えーーーーーーーー?」

「ちょっとジュリエット、どーゆーこと?人の彼氏とつとつて…・・・

「「めん…・・・だけど…・・・」

その時ロミオ君がジュリエットの右手を掴み
全力でジュリエットを引きずりながら

お店を出て行きました。

お店は荒れ放題。

誰が弁償するのでしょうか?

夜の街にはジュリエットの叫び声が響きます。

「イダ――イ――」
「――きゅうるなあああ――」

合戻りを抜け出したジユリエットとローラー君

2人は行き場をなくし困っていました。
エンジ色の電車が通るすぐ側の公園のベンチで
しばらく休むことにしました。

「引きずるなんて、ヒドイ」

「すまない・・・」

「アンタって奴はホント最っ低な奴ね」

「ごめんなさい・・・」

「ケンカはオヤメナサイ！」

後ろから声がしました。

「アンタ、誰？」

ジユリエットは後ろにいた不審な男に聞きます。

見た目は思いつきり関西のオヤジ。

頭部はザビエルのようになつており、某虎軍団のはつぴを着て聖書
を持っている

いかにも「胡散臭い」おじさんでした。

「ワタシはローレンスと言います」

「何で片言なんよ？」

「最近日本に来たばかりでよく分からぬアルね」

「いや、それウソやる」

「本当デス。阪神優勝」

「もういいから、ほつといて」

「いえいえ、ケンカの訳を聞かせてくだサイ」

「うやら一番ややこしい人につかまつてしまつたみたいで」

「ロミオ君が珍しく男らしく立ち向かいます」

「今からいいとこなんでお引取り願えませんか？」

「もしもし君たち帰りなさい」

「ローレンスは2人を切り裂く言葉をかけました

「やっぱしアンタ思いつきり日本人やろ？」

「いいえ違ひマース」

「もうええから帰つて」

「仲直りしてくだサイねー結婚式やご相談はロレンス教会まで~」

「そんなことを言い残してローレンスは帰つていきました」

再び公園には

ジユリエットとロミオの2人つきりです。

「やつとあのおつさんどつか行つたね」

「ああ。これで2人」

「2人・・・」

「・・・・・」

「・・・・・」

ジユリエットは大変なことに気付きました！

2人のときに会話がない・・・

第四話

会話がなくて困っていたところ//木君が話し始めました

「こんな俺でいいん?」「
引きずらなかつたら・・・」「
じゃあ結婚しよう!」「
はあ!?」「
俺じやあかんの?」「
いや・・・だつてまだ学生やしね・・・」「
卒業して、すぐ結婚しよ!」「
でも・・・」「
何をそんな困つてるん?」「
だつて突然だし、出会つたばつかやし・・・」「
何言つとん?俺ら運命やつ!」「
え・・・」「
出会つてばば」「
・・・」「
な?だから、結婚しよう」「
うと」「
うと」

ロ//木君は子供のよつてしゃれまわつました。

「家まで送るよ」「
ありがと!。ウチの親に会つへ。」「
うふおー挨拶しとくわ!」

「パパもびっくりするやうな。えへへ」

「お父さん、娘さんを下さい！」

「そんな言つたらパパ倒れちゃうよ」

「あはは」

「あはは」

「・・・・・」

「・・・・・」

再び会話がなくなつてしましました。

これからもこんな調子なのかな？

とジュリエットは思いましたが
ある意味話題を探さなくて楽かな
みたいに思つたのです。

2人は夜の街を手をつないで歩きました。

ゆっくり歩幅をあわせて
ゆっくりゆっくり・・・

駅に着きました

2人でジュリエットの地元に向かいます

夜遅いせいか

エンジ色の電車には

ジュリエットとロミオ君
たつた2人だけです

緑色のシートに腰かけ

ミュー・ジカルの広告を見つめ

駅はどんどん過ぎていきます。

一つ手前の駅でドアが閉まつたとき

ロミオ君はジュリエットを抱き寄せました

—
何
？
—

「あ、あと少しだから」

二
二

ちゅべーん（心の瓶）

麿が触れてしまふた!!!!不覚にも!!

卷之三

そしてジュリエットの家に着きました。

「大きな家だね」

「ハルカ長ちの」

ガチヤ

「おかれりー彼氏さん？」

うん、あ、
口三才君入って

あらわしやまくら

「パパ、ママ、この人が私の彼氏の・・・」
その時ジュリエットの父親は叫びました。

「そいつと離れない！」

卷之三

「私の彼氏よ？」

うちの会社の製品の海賊版ばかりを作る会社の息子だ

卷之三

「離れる。お前もうちの娘に近寄るな！」

「待つて、パパ！ 彼はいい人なの！」

「いい人なわけあるかい！」

「いい人よ。ねえ口ミ才君！！！」

「俺は・・・親父の会社なんて継ぎません・・・」

お父さんはがんがんに怒って奥の部屋に消えました

お困りなんか無いよ。

「あんなにしゃべるといふと、ハロハロ！」

卷之三

あゝ、口の春、こめんれ、和様又は歌の口

「かのくの」

卷之三

二二

גָּמְנִים

「乃今之謂也。」

「元気の梅なメロシズム」

「そんなの関係ねえ

「あつぱつびー

「ねやすむ」

「おまかせ」

そしてロミオ君は家路につきました。

次の日

父親に交際を反対されたジユリエットはロミオ君と共に

胡散臭いローレンスの元へ

相談に行くことにしてみました。

「あのおっさんで大丈夫かな？」

「でも俺らあの人以外に頼れなくないか？」

「それもそうだけど・・・」

「大丈夫、一応牧師だ」

「モグリの牧師だよ、アレ」

「俺も偽者だと思ってる」

「そうだよね・・・ってダメやん！」

「まあ仕方ないではないか」

「そやね・・・」

2人は教会と思われるところに着きました。

「すみません、牧師さんいらっしゃいますか？」

すると奥から声が聞こえました

「あ？ 昨日の2人？ ちょっとまっててー」

ジユリエットはロミオ君に言いました。

「ちょっと昨日と喋り方違うくない？」

「うん……」

すると奥から

今にも「どんだけー」と言いたくなるようなはだけた格好で
体格のいい頭部がザビエル状の人が現れました。

「「めんなさい、待つたかしら?」

「・・・・・」

ジユリエットは言いました

「あのう・・・ローレンスさんは・・・?」

「私ですよ 昨日の彼女ね」

「いや・・・あなた全然違うかと・・・」

「んもう、失礼しちゃうー夜はあんなんだけど本当のワタシはコレ
よ」

「え・・・・・冗談を・・・」

ロミオ君は言いました。

「いや、彼は昨日の奴や。頭部が同じだ」

「え・・・あ・・・・ホンマやー」

「いあん!失礼しちゃう」

とりあえず不審な牧師ですが

2人は一部始終をローレンスに話しました。

「禁断の恋ね!ワタシもえちやう!…!…」

「そんなことより私たちどうしたらいいでしょ?うか・・・・・

「そうね・・・結婚式しちゃいなさい!…」

「えー!…!…!…!…?」

「既成事実なら誰も反対しないワ」

「でも・・・急には・・・」

「大丈夫よ。」こは教会だし、ワタシだつているわ
「アンタが一番不安なんだよ・・・」

といふことで

急遽2人の結婚式が行われることになりました。

「ロミオ君はもちらんジユリちゃんに愛を誓つわね?
「もちろんだす」

「だす・・・? (心の声)

「ジユリちゃんもロミオ君愛してるわよね?」

「一応・・・」

「じゃあ、2人でちゅーしてちょーだい」

「え・・・」

「誓いのちゅーよ」

ジユリエットは昨日の電車の中を思い出しました。
たつたあれだけで、思い出しただけで
心臓が飛び出しそうです。

そうしているうちにまたロミオ君が近づき・・・

ちゅーん

「もうジユリちゃんつたらウブなんだから
これで2人も幸せになれたらいいけど・・・

そうして結婚式は終わり

2人は駆け落ちすることにしました。
誰も知らないどこか遠くへ・・・。

そうして2人はタロの町で新しい生活を始めることにしました。

2人の甘い新婚生活も2週間たつたころ
ロミオ君は町へ仕事にジュリエットは家で洗濯をしていました。
そんなある日、一人の家にあるお客さんが来ました。

「突然尋ねてすみません。マー キューシオです
ロミオ君の大親友のマー キューシオ君でした。

「何もないけど上がつてください。どうしたんですか?」
ジュリエットは聞きました。

「とつても大変なことになつてます。」

「え? どういうこと?」

「ジュリエットさんの親御さんが大変怒つてまして・・・」

「うん・・・」

「ロミオの父親と敵対してるのは?」存知ですかね?」

「はい」

「2人の争いが激化して黒魔術の横行や牛の刻参りなどが多発して
まして」

「・・・」

「2人にも魔の手が忍び寄っています」

「え・・・でも・・・」

「お願いです。もつと遠く、海外に行つてください」

「だけど・・・」

「俺は2人に幸せになつてもらいたくて命を懸けてここまで来ました」

「でも・・・そんな・・・」

「俺にも黒魔術が・・・ゲハツ・・・」

マー キューシオは倒れこんでしました。

「だ・・・大丈夫ですか?」

「お・・・俺は・・・2人を守りたくて・・・」

「救急車呼びますから、喋らないで！」

「い・・・いいんで・・・早く・・・にげ・・・て・・・くだ・・・」

「バタン・・・」

マーキューシオは息をしていません。

黒魔術の餌食となつてしまつたのです。

「どうしよう・・・ロミオ君・・・」

はてさて、えらいことになつちゃいました。
丑三つ時に不審者を見かけたら
きっとそれはこの争いの関係者です。

第六話

ジュリエットから連絡を受け
ロミオ君は仕事を放置して家に帰つてきました。

ロミオ君は家に入るなり

信じられない光景を目の当たりにしました

「なんでお前が膝枕してんねん！」

ジュリエットは
もう動かないマークьюーシオを
まだ救えると信じ
膝枕していました。

「もうええから離れろ！」
「でも・・・可哀相だし・・・」
「お前は俺より死体を抱くんか？」
「そういうわけじゃなくて・・・」
「ただの屍は放置しどけ！」
「ヒドイ」
「敵は俺が討つ」
「え・・・？」
「俺、こう見えて黒魔術2級なんやぞ」
「黒魔術に検定なんてあるんや」
「いや、自称だけどな」
「意味ないやん！」

そういうわけで

ロミオ君が親友の敵討ちをすることになりました。

マークューシオの黒魔術は
ジユリエットの従兄弟のティボルトによるものだといふことが分か
りました。

早速ロミオ君は腹痛の黒魔術をしてみました。

ミス

ティボルトはみがまえた！――！

ロミオくんの「アラモ――！――！――！――！」

地獄の黒魔術をとなえた！――！――！――！――！

ティボルトは100のダメージをうけた！――！――！

ティボルトはしんでしまった

「敵討ち完了しました！」

しかし、この敵討ちが

2人をさらに追い詰めることになってしまったのです。

ティボルトがロミオ君の黒魔術によって死んでしまったことを知った
ジユリエットの実家の町内会会長エスカラスさんは
ロミオ君とジユリエットの捜索に本格的に乗り出します。

そんなことを知らずに

ロミオ君とジュリエットは

甘い甘い新婚生活を送っていたのです。

ある日の深夜でした。

「うーん、ジュリエット・・・

「どうしたん？あ？寝言？..」

「どこにも行かんとつて・・・」

「こんな遅くにどこも行かんわ

ガチャガチャ・・・

「ちょ・・・・ロミオ君！――！」

「ジュリエット――（抱き）」

「ちょ・・・・ドアを誰かがいじつてるー..」

「俺の心のドアをノック横山

「・・・・ねい！」

キィイイ・・・

「ちょ・・・・ドアあいたつてば――！」

「ジュリエットの心のドアも開けて～」

「何言つてるんよ？え・・・・きやつ・・・・

「ジュリエット・・・？」

「・・・・・」

「ジュテーム？」

「・・・・・」

「い・・・・・

「お・・・・・無視かよ？」

「い・・・・・加減にせえよーお・・・・・

「・・・・・・・・・

「ジュリエットへおひんの？？」

「・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・

そこにはジュリエットの姿はなく
一枚の手紙だけが置いてありました

『ジュリエットは返してもらつた。
Yōuは一度と町内のアイドル、ジュリエットに近づくことはでき
ない！』

ジュリエットは
エスカラスさんの刺客によつて
地元に連れ戻されたのでした。

次の日の朝

ロミオ君は始発の電車で
ジュリエットの地元へ向かいました。

しかしジュリエットの家の周りには
警備員のオッサン方がずらりと隙間無く並んでいたのです。

ああ、もう愛しのジュリエットには近づけないのか
そうロミオ君が思つたとき
バルコニーにジュリエットが出てきたのです

「ああロミオ、どうしてあなたはロミオなの・・・」

とどこかで聞いたことあるようなことを
ジュリエットは叫びました。

ロミオ君もバルコニーに向かつて叫びました

「ジユリーハーナー

「ア

「ロ・・・・ロ!!オ――――――――

「俺、改名するから―何がいい?

「え・・・?

「ロ!!オつて名前氣に入らんのやん?

「・・・・このクソダボが――――――――

「待つてろ!迎えに行くからな――

「・・・・・そうこなくっちゃ!

ロミオ君は考えました。
頼れる人がいない
頼れるのはたった一人

ローレンス

ロミオ君はローレンスの所に行くことにしました。

「あら、いらっしゃい」

ローレンスはハーブティーを飲んでいました。
ロミオ君にもハーブティーを勧めました。
しかししながら
ロミオ君にはそんな余裕はなく
一部始終をローレンスに話し始めました。

「ロミオ君、わかつたわ。でも・・・
「やつぱりもう諦めるべきですか？」
「違うわ。お茶が冷めちゃってるわよー」
「そんなことどーでもいいし」
「もう、冷めたら美味しくないのよー」
「すみません・・・」
「いいのよーいい男が謝っちゃダメー」
「はあ・・・」
「ジユリちゃんの」とせワタシに任せでー」
「いいんですか？」
「ワタシが彼女を連れてきてあげる。だけど・・・」

「だけど？」

「一步もウチから出たらダメよー。」

「わかりました」

そうしてローレンスはジュリエットの家に向かいました。

ピンポーン

「どなた？」

「あ、ワタシ、ジュリちゃんのお友達ですの。」

「ジュリエットの？あ、上がってください。」
ローレンスは明らかに禿げた男だったにも関わらず
家に入れてもらうことことができました。

ジュリエットの部屋につきました。

「まあ可愛い部屋ね。お邪魔するわね。」

「邪魔するなら帰つて」

ジュリエットは泣いていました。

「もうジュリちゃん冗談キツイわよ！」

「ローレンスさん・・・私・・・」

「可愛い子が泣いてたら台無しよー涙を拭きなさい」

「でも・・・ロミオ君が・・・」

「そう、ワタシはそれで来たの」

「え・・・？」

「あなた、死んだフリしなさいー。」

「そんなん無理です」

「じゃあこの薬をあげるわ。」

「何ですか・・・？」

「一時的に仮死状態になる薬よ」

「これ飲んどうするんですか？」

「あなたは遺書を書いて薬を飲むの」

「はい」

「遺書にはウチの教会で葬式するよつて書いてあるよ。」

「はい」

「そしたらウチにロミオがいるわ」

「教会でロミオと会えばいいんですねー。」

「ええ。そして2人で海外に逃げなさいー。」

「明日の朝飲むのよ。効果は1~2時間だから」

「わかりました。ありがとうございますー！」

「ちゃんとやるのよー。」

「はい」

そうしてローレンスは帰っていました。

ジュリエットは書かれたとおり遺書を書きました

『愛するパパとママ

ロミオ君と会えない日々を送る」とは

私には無理です

ごめんなさい

お葬式は

お世話をなつたローレンスさんの教会で

執り行つてください

ジュリエット』

そしてジュリエットは薬を飲みました

次の日の朝

ジュリエットの家の執事さん（めえー）が

冷たくなつて動かないジュリエットを見つけました

「お嬢様！大丈夫ですかめえ！」

「・・・・・」

「し・・・死んでるめえ！」

ジュリエットの両親は

ジュリエットの望みどおり

ローレンス教会で葬儀を行つことにしました。

「はい、お葬式、ジュリエットさんですね。」

「はい・・・お願いします」

「いいですよ。」

「すみません、娘のわがままを・・・

「気になさらないで。では前金50万円お願いします」

「え・・・？」

「あ、ウチは前金いただくシステムとなつてますので「

「お宅教会ですよね・・・？」

「すみません、葬式業務は別ですので」

「（きたねーな・・・）わかりました」

「ともあれ、お召し物も変えられた方がいいわ」

「じゃあ私たちは家で着替えてきます」

「ええ、じゅつぐり・・・」

そしてローレンスは

冷たいジュリエットと50万円を受け取りました。

「作戦成功ね！」

「何が成功だよ」

後ろにロミオ君が立つていました

「あ、ロミオ君出てきちゃダメじゃない！」

「出でくるもなんも……ジユリエット死んでもたやんけ……
「死んでないわよ……あ……言つてなかつたつけ？」

ローレンスは氣がつきました

ロミオ君にこの作戦を伝える」とを
すつかり忘れていたのです！……

しかし氣付いたときは遅すぎました。

ロミオ君は持つていたカッターナイフを握り締めていました

「ローレンス……貴様……」

「違うの……だから……ジユリエッタは……
グザツ

ロミオ君はローレンスの頸動脈を切りつけました。
血が噴水のように飛び散ります。

ローレンスをたおした

「ジユリエット……すまん……
ジユリエットは「ひ」かない

ただのしかばねのようだ

「今からお前んとこ逝くよ……」

そしてロミオ君は自分の左手首を切りつけました
血が川のように流れていきます

この騒ぎでジユリエットは田を見ましましました

「もお……ひるといなあ……」

「……」

「なんか臭いし……つて……」

ジユリエットは田の前が血の海で
ローレンスとロミオ君が倒れていきました
「え……どーゆーことよ！？」

ジュリエットは気が動転してしまったので落ちていたカツターナイフで自分のいたる所を切りつけてしました。気付いたときには自分は真っ赤になつていき目の前が真っ白くなつていつたようなきがしました。

ジュリエットはたおれたパーティはせんめつした

1時間後

ジュリエットの両親は教会で動かない三人を目の当たりにし全てのからくりを知つてしまつたのです。

この事件から1ヶ月後

敵対していたジュリエットとロミオ君の父親は和解することになりました
ジュリエットとロミオ君は2人は同じ墓で眠ることができました

しかし

2人はもう、いません

一緒に笑うことも泣くこともそんなすがたを見る 것도できないのです

若すぎる2人の死

誰もが悲しみを忘れることができないでしょ。う。

海の見える大きな前方後円墳で

よく人身事故を起こす電車と田舎の電車を見ながら

今日も2人は

安らかに眠っています

そしてその隣の

小さな円墳で

ローレンスが眠っていることでしょう

やしのやの後

「じいがで見た」とあるやうな懐かしい暖かいまぶしい光に包まれたロミオ君。

目を開けると田の前にいたのは・・・

「あら、お田覚めになつた?」

ローレンスだつた・・・。

「なんでお前がおんねん・ジユリエットはー?」
「ジユリエッタも生きてたのに、ロミオ君が殺しちゃつから・・・」
「え・・・」

ロミオ君は自分の過ちに天国にて気がつきました。
遅すぎです。

「まあ、もういいじゃないー。」
「よくねー・・・」
「じいは天国よー酒は美味しいしねーひやんはキレイよー。」
「そんな気には・・・」

きれいなおねえさんがたくさんいます。
手招きをされているような気がします。
「あ・・・おひが・・・」

「まあ、ジユリちゃんもいない」とだし

「おらはしんじまつただ――――――.」

ともあれロミオ君は天国で羽を伸ばしていくことを決意しました。そしてローレンスも何故か女遊びをしようと決意しました。

「ちゅうへんあんたらー」

ジュリエットが来てしました。

「あ、ジユリエット……あいたかつた！……」

あはああ！わ、わあでねー！ヤバイとか言ってたしやなし

「そんな」と言つてない！俺にはジュリエットだけやー。」「てか私、一部始終見てたんであるナゾ・・・」

— —

と・・・とつねん

天国で皆仲良くな暮らしましたと。

「てか口ーレンスっておかまじやなかつたの!?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4940d/>

女子大生とバカ男

2010年10月17日01時34分発行